

インドネシア共和国 在大阪総領事一行御来館

本年8月3日、在インドネシア大阪総領事のディアナ・エミラ・サリー・スティクノ様(写真の、ウエルカムボード横の女性の方です)が総領事館の経済担当領事等を同行されて来館されました。総領事一行は、前日に和歌山県に入り、県知事表敬訪問の後、県内各地事業所等を視察され、白浜温泉へ宿泊、最後の訪問先として「稲むらの火の館」へ来られました。



平成27年12月に「世界津波の日」が制定されました。それを機会に28年1月に「稲むらの火の館」とインドネシア・スマトラ島にあります「アチェ津波博物館」が提携をして、今後、津波防災の情報を発信しましょう、ということになりました。その年4月に「アチェ津波博物館」の中に、「ジャパンコーナー・稲むらの火コーナー」が開設されました。そのコーナーのオープニングセレモニーと同時に、仁坂和歌山県知事が、ジャカルタ等で講演され、和歌山県とインドネシアの経済交流が伸展しました。その後、インドネシアから各種の訪問団が和歌山県へ来られました。「稲むらの火の館」にも外国の見学者が大勢来られるようになりました。もちろん、一番多いのは中国からですが、その次に多いのはインドネシアからです。こうした深い関係があって、現在のコロナ禍にあっても交流を維持し、終息後の経済交流がより互惠的・実質的な交流となるよう来られたのです。

「東京パラリンピック」の聖火へ 「稲むらの火祭り」火が集火される

オリンピックが終わり、今また「東京パラリンピック」も終わろうとしています。オリンピックの聖火は発祥の地ギリシャで太陽から採火され運ばれてきました。一方、東京パラリンピックの聖火は、全国47都道府県で採火された火を集め、一つの聖火にまとめたそうです。

その「和歌山県の火」は令和元年の「稲むらの火祭り」の火が保存されていて、東京都内で行われた集火式で統合されたそうです。

全国の特徴のある話題性の火を集めて、聖火にするという発想はたいへんユニークだと思います。そして、その和歌山県の火に防災をアピールする「稲むらの火祭り」の火が採用されたこともうれしいことです。

パラリンピックに参加されたアスリートの皆様や、全世界で関心をもっている皆様に、防災の火も点火できたら素晴らしいことですね。スポーツだけではない分野も一緒に発信できたのは、オリンピックにはない大きな思いです。



「第16回稲むらの火講座」は延期します

前号でお知らせしました「第16回稲むらの火講座」は、コロナの感染がたいへん拡大してきました。蔓延防止のため延期いたします。

講師の先生方とご相談の上、コロナ状況が落ち着いたら実施のお知らせをいたします。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第6回 「キロクアメ」と「キキクル」

みなさんは、「記録的短時間大雨情報」という気象情報が発出されたときに、どのような感覚をいただいているのでしょうか？ なんだか文字数が多い用語なので、大変そうだろうとは思いますが、うけれども、しかし、「特別警報」や「避難指示」との関係もよくわからず、最近注目されている「線状降水帯」の情報とも異なるようですし、それでは一体なんなのか…。

これは、数年に1回程度しか発生しないような短時間の激しい大雨を雨量計で観測したり、レーダーで解析したりしたときに各地域の气象台が発表する情報です。業界では、略して「キロクアメ」と呼んでいます。これは、現在の降雨がその地域にとって土砂災害や浸水害、中小河川の洪水災害の発生につながるような、稀にしか観測しない雨量であることを伝える、まさに命に関わるはずの情報なのです。

ルーツは、「昭和57年7月豪雨」（長崎豪雨災害）にあります。この災害では、従来大雨警報・注意報では危機感を伝える上で不十分だったという反省が残されました。そこで、地域をしばりピンポイントで警戒を呼び掛けるために「キロクアメ」が生まれたのです（ただし当初は、呼び名が異なりました）。仮に、同じような場所で繰り返すこの情報が発出されるようなことがあったとしたら、“これはもうただごとではない”と受け止めなければなりません。

実際にどこで災害発生の危険度が高まっているのか確かめるには、気象庁の「キキクル」のサイトやアプリを参照するとよいでしょう。地図上に危険度が5段階に色分けして表示され、エリアを拡大して見ることもできます。情報は10分ごとに更新されます。2～3時間先を見通した予測値から危機を呼びかけてくれます。長崎豪雨の教訓を糧に、安全・安心な暮らしを実現しましょう。

「濱口梧陵文庫」について

濱口梧陵翁が生涯かけて読み続けたと言われていた「濱口梧陵文庫」と呼ばれる書籍群があります。以前は西濱口家の書庫に木箱にきっちり詰められていました。和綴じの書籍で、私もかつて教育委員会から依頼されて、書名や頁数を調査したことがあり、今も目録があります。

その後、「梧陵文庫」は西濱口家から和歌山県立博物館へ寄贈されました。

令和3年3月付で、「和歌山県立文書館紀要」第23号が発刊されました。その冒頭に、県立図書館の松本泰明氏が「近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館蔵「濱口梧陵文庫」という調査研究の報告文が載っていました。「梧陵文庫」についてのことが詳しく書かれています。梧陵文庫の中味は5400冊くらいあり、その内3分の2以上が中国から輸入した漢籍と言われる本だったと思います。日本の和本もほとんどが漢字ばかりですが、漢籍の文章は中国語だから、私たちにはよけい意味不明でした。

さて、我々が調査した当時にも気がついていたのですが、これらの本の欄外にたくさんの書き込みがありました。当時も、この書き込みをしたのは梧陵翁であるのか、たいへん興味があったのですが、分からず仕舞いでした。

この程の松本氏の調査で分かってきたのは、「梧陵按」という字があって、「梧陵翁調査」という意味のようです。だから、「梧陵翁」が書き込んだということが証明されました。また、梧陵翁が書き込んだ本は、アジアの地理などにかかわる本があるようです。梧陵翁は若い頃から地理学に興味をもち、ことに我が国と直接関係の多い朝鮮と支那の地理のことは深く研究していた、ということは「濱口梧陵伝」にも載っています。「梧陵文庫」の書籍群で裏付けられたということでしょう。

梧陵翁が、アメリカへ渡った時には、次にヨーロッパへ回る予定だったと言われますが、その後はアジアも含めて世界一周も目論んでいたのではないのでしょうか。途上、ニューヨークで亡くなったのは、誠に残念なことでした。